

# なにわの元プロ野球選手⑤

## 元オリックス投手 山内嘉弘さん (46)

阪急最後の、オリックスでは初代リリーフエースとして活躍した山内嘉弘さん(46)は、現役時代150キロ近い剛速球とフォークボールを駆使して、パ・リーグの居並ぶ強打者に対峙した。ヤクルトに移籍すると、在籍3年で2度の日本一に貢献。摂津市生まれの豪腕は引退後、古巣オリックスの球団職員となり、現在は二軍用具担当の肩書きながらバッティングピッチャーも兼ねる。かつてスポットライトを浴びた守護神は現在、裏方として後輩たちを支えている。

### KKコンビのPL 苦しめた公立の星

オリックスの歴代中心バッターで、打撃投手としての山内さん重宝する選手は多い。なにしろ、ホームランを打ったイチローが「練

(フリーライター 吉岡雅史)

習の時の山内さんの球に比べたら(ロッテの)黒木のスライダーなんて」と言っただけだ。

「三流のバッターは、練習でもボールに慣れるのに何球かかかる。でも一流の選手は同じところに投げたら同じところにホームランにす

## 一生懸命の美しさ マウンドで、裏方で



引退して15年が経つが、体格の良さはとても40代とは思えない

る。だから、二軍の若い選手には、そういう領域を目指してほしいんですけどね。親子ほど歳の離れた選手たちを見守るの目は、厳しくも温かい。

山内さんの名が一躍野球界に轟いたのは、茨木東高校3年の夏だった。創立5年目の公立校が大阪大会の準決勝まで進出。敗れはしたが、桑田・清原のいわゆるKKコンビが1年生の時のPL学園を終盤まで1対0でリードしていた。8回に逆転されて甲子園の夢はついに消えた。その前日の準々決勝で延長16回を投げ抜いていただけに、なおさらである。

実は筆者と山内さんは幼馴染である。小学6年ごろよく地区のソフトボールチームのレギュラーになった筆者は、2学年下の山内少年が入部してくると、またたく間にポジションも打順も奪い取られた縁がある。筆者に、社会の厳しさを最

初に教えてくれた相手だった。あの憎き山内め……ではなく、近大に進学した山内さんは、順調に一流選手への階段を駆け上って行く。そして1987年秋のドラフト会議で阪急の2位指名を受けた。

### 1年目にリリーフエース セーブ数は新人最多記録

守護神アニマルが抜けた88年の阪急は、抑え投手不在が深刻だった。そこに現れたのが山内さんで、6月にプロデビューを果たすと7月に初勝利、8月に初セーブと、新人ながらリリーフエースの座を勝ち取った。

「リードした場面は、正直いやでした。先発投手の勝ちを消してしまふ恐れがあるから。同点だったら勝とうが負けようがすべて自分の責任なんで、気は楽でした。もっとも、点を取られる気なんてしませんでしたよ」

1年目は4勝11セーブ、球団名がオリックスに代わった2年目も4勝12セーブをマーク。特にルーキーイヤーのセーブ数は新人の最多記録だったが、本人は知らなかった。2年後に中日・与田剛が31セーブを挙げて新人王に輝いたシーズンに、「新聞に『与田が新人記録更新。これまではオリックス山内』って書いてあって、びっくりですよ」とアツケラカンと話す。

その後は右ひじ痛の影響もあって登板機会が大幅に減り、95年にはヤクルトにトレードとなった。この年の日本シリーズはヤクルトVSオリックス。第1戦の前に首脳陣に呼び出され、「戦力外通告か?」と恐る恐る顔を出す、「相手の弱点を教えろ」。そこで告げたオリックス攻略法は効果てきめん。中でもイチロー対策が威力を発揮し、ヤクルトは4勝1敗で日本一を奪回した。

### 明日のスターたちの育成へ 全力投球は続く

「いろんな監督のもとでやったけど、野村監督は最高でした。選手のためにしてくれる。僕が大事な

場面で打たれると、監督はマスコミの前でポロクソには言っただけで、記者の取材がそこで終わるから、僕までこない。試合中も『古田のサインは俺のサイン。打たれたら俺の責任』って。とにかくプレーに専念しやすい。まあその分、ミーティングは大変でしたけど」

自身初の日本一を経験した翌シーズンに、山内さんは右ひじの手術を受けた。筆者はつぎ、出番が減ったオリックス3年目以降の故障が限界にきたのだと思っていた。ところが……。

「骨折してたんですよ。中学の野球部に入って初めてマウンドから投げたときに、バキッて。でも痛いけど、投げられた。大学でもプロに入っ

てからも、他のピッチャーに『投げたあとで、ひじむちや痛いですよね』って言っつと、それはお前だけやといわれました。で、骨折がわかって、直るのに半年かかりました」

97年に戦列復帰するとシーズン2勝。8年ぶりの勝ち星は巨人戦で飾った。そことは知らず、ウイングボールをスタンドに投げ入れてしまつあたりが、山内さんらしい。

まだやれる自信はあったが、チーム事情もあってこのシーズン限りで引退。10年間の通算成績はすべてリリーフで、10勝5敗23セーブ。当時は負けていても出番があったし、複数イニングも当たり前だったので、数字に表れない貢献度が伝えずらい。それでも、新人なが

ら抜擢してくれた上田監督は「あいつの心臓は特別製やで」とほめたたえ、ボヤキで有名な野村監督ですら「一生懸命投げる姿が美しい」と絶賛した。2人の名将から、最高の評価を受けたプロ野球人生だった。

「悔やむとしたら、なぜスピードばかり追い求め、コントロールを軽視してきたか、ですね。130キロでも低めに通しておけば、まずアウトにできる。150キロでも速いだけで打たれるのがプロの世界」

山内さんは時折、合宿所に泊り込んで若手の面倒を見ている。自らの経験と反省を踏まえ、明日のスターたちの育成へ、全力投球は続く。

## 2012 ATEX 文化論 いわみせいじのヨコシヨコシ

